

（ 邪馬台国畿内説を決定づけるか？^{まきむく}纏向遺跡（桜井市） ）

桜井市教育委員会は、11月10日、邪馬台国畿内説の有力候補地である「纏向遺跡」(桜井市辻)の発掘調査で、3世紀前半とみられる国内最大の大型建物を含む2棟の建物跡が見つかったと発表。14、15日の現地説明会も多くの考古学ファンでにぎわい、新たな観光資源としての期待も高まっている。

纏向遺跡は、桜井市北部、神の宿る山として信仰される三輪山の北西麓一帯に広がる、弥生時代末期から古墳時代前期の国内最大級の遺跡群で、前方後円墳発祥の地とされると同時に、初期ヤマト王権発祥の地として、日本国家の生い立ちに関わる重要な遺跡であるとされる。

今回の纏向遺跡第166次調査は、平成21年9月1日～11月30日にかけて約390㎡が発掘調査されたもので、大型建物の規模は、東西12.4m、南北19.2m、床面積は238㎡となり、邪馬台国九州説の有力候補地である吉野ヶ里遺跡(佐賀県神埼市)の大型建物跡(156㎡)を大幅に上回る。

また、昨年度の調査で、隣接地で建物2棟の柱跡と柱列跡などが確認されているが、今回確認された2棟とは方位および軸線が一致し、4棟の建物は東西に連続して構築されていたことが判明した。

これら一連の建物は明確な設計図に基づいて、強い規格性を持って構築されたと判断され、これまでの周辺の調査成果も踏まえると、3世紀前半に纏向遺跡の中心の人物がいた居館域であったと考えてほぼ間違いないとされている。

このように、複雑かつ整然とした規格に基づいて構築された建物群の確認は国内最古の事例で、これまで判明している弥生時代の大型建物などは完全に一線を画しており、また、3世紀前半は、ちょうど、女王「卑弥呼」の生きた時代であることから、その宮殿である可能性もあり、邪馬台国論争の解明につながる画期的な成果となった。

また、遺跡の南方には卑弥呼の墓との説もある箸墓古墳(前方後円墳、全長280m)もあり、今年5月には、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)の研究チームが、古墳の周囲から出土した土器の放射性炭素年代測定による分析の結果、西暦240～260年に築造されたとの研究成果を発表しており、248年ごろとされる卑弥呼の死去した年代と合致することから、邪馬台国畿内説が高まっていた。

ただ、現時点では、建物遺構周辺の土器類の整

理が終了しておらず、厳密な年代測定は困難な状況にあり、邪馬台国九州説の立場からは、年代の測定方法について技術的な誤差が解消されていないことや、纏向遺跡の全体構造が明らかになっていないことで、この段階での議論は時期尚早とする見方もある。

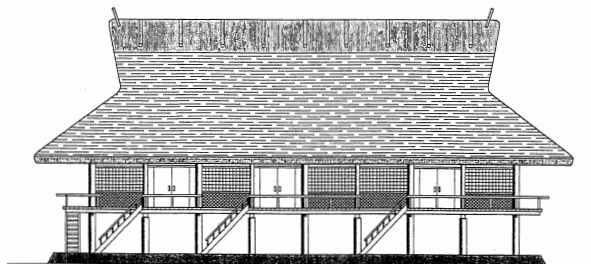
(山城 満)



「纏向遺跡」の宮殿跡発掘現場。



第7代孝靈天皇の皇女「倭迹迹日百襲姫命」(やまとととひもそひめのみこと)が葬られたとされる箸墓古墳。「昼は人が造り、夜は神が造った」との伝説がある。「卑弥呼」の墓とする説もあるが、現在、宮内庁の陵墓参考地となっているため、自由な立ち入りや研究者などの発掘も許されておらず不明な点が多い。



建物0 真立高図

神戸大学建築史研究室による復原案。(現地説明会資料より)